早稲田大学大学院日本語教育研究科「日本語教育と音声」研究会資料（2007/7/7）

音声教育の基本的守備範囲再考

大阪大学大学院文学研究科　土岐　哲(ﾄｷ ｻﾄｼ)

＜大局的音声教育観＞
0.なぜ、音声か？
1.音声と現実社会(他言語との条件差)
2.音声教育贅沢論？(音声教育の史的変遷)
3.音声教育の守備範囲(知識・技術と哲学のバランス)

＜史的音声教育概観＞
4.音声(学)の苦手意識蔓延について
5.音声(学)の捉え方、伝統的教え方の問題
6.「記号」は万能か？（人間不在のペーパー・フォノロジー）

＜見直し論＞
7.身近な音声学（「自分の言葉」で実感し語れるために）
8.音声学と応用音声学との間（「ここまでおいで」でよいか？LL の失敗？）
9.学習者への接近--（受容と生成：できるようになる喜び）
10.習得と未習得の判断基準（偶然の一致の扱い）
11.気付きのパラメータ（依存パラメータ）(音声レベルの双方向連動性：ｲﾝﾄﾈｰｼｮﾝと単音)

＜教師の問題＞
12.NS 教師と NNS 教師（果たして NS は、すべてに優るか？）
13.＜実験：耳の付け所＞出渡り p-,t-,k-と入渡り-p,-t,-k（同様に m,n,ng）その他各レベル
14.NS の短所（自己の生活感覚に安住していないか：データの代表性、実証性）
15.自己モニター能力（体系的か断片的か）
16.「日本語の知識」だけで十分か？（一般音声学的知識・能力(学習者に学ぶ態度)）
17.アクセントの「相対的高さ」が意味するもの
18.アクセントとイントネーションの混乱
19.職業病としての日本語（社会の一部ではあるが）(名ばかりのコミュニケーション)
20.モノローグとダイヤローグは本当に異質か？(背中合わせの会話、パラ言語)

＜音声媒体資料選定・作成上の問題＞
21.音声教材作成上の責任と音声の評価能力(自己モニター・評価)

22.「受容練習用」と「生成練習用」（コンセプト論）
23.「音声指導」のいろいろ：学習者、同僚、声優（「丸投げ」が圧倒的に多い）
24.試験問題の問題（緊張と集中）
25.音声のリアリティー（SE の実現と文化差）
26.読み手の選別・評価能力（「音声表現チェックリスト」：近刊）

＜より広い社会との関わり＞：(音声教育に必ず絡んでくる周辺的諸条件も含める必要)
27.国語教育と日本語教育の接近～融合
28.NS なら必ずコミュニケーション能力はあるか？(その教育環境は十分か？習ったことのない教師に教えられるか？)
29.聞き手（双方向の同時進行的観察(ﾊﾟﾗ言語も含む)
30.話し手としての反応観察・反応の選択・実行
・・・・などなど。以下略。